

地方創生へ。産業城下町作りを 【真野 博司（専門分野：産業立地論）】

FellowLink 倶楽部 2014/11/01 #16 に寄稿

アベノミクスの次の大きなテーマとして、「地方創生」が打ち出されました。私ごとで恐縮ですが、産業立地研究所の代表取締役社長・所長を退いてから一年余が経ちました。会社設立以来、43年間、経済産業省や自治体から委託を頂き、産業立地を核とした大都市圏、地方圏の振興に関わる調査、研究、計画作成、政策提言に取り組んできた経験から言いますと、地方振興、地方再生、地方創生などの名称がついたテーマはいつも古くして、新しいテーマであり、言うは易く、成功は難しいものです。全国に成功事例はあるものの、そこに至る道程は平坦ではなかったようです。

今、「地方創生」が大きな政策課題になり、今後どのような事業が登場し、どのような政策支援がなされるか成り行きを注目していますが、ここで一つ提案があります。それは地方創生を促進するため、地域資源を最大限に活用して、「産業城下町」作り挑戦して貰いたいということです。

産業城下町作りは、私がかつて読売新聞の論点（1987年11月24日）等で提言したことです。これは今も通用する考え方ではないかと思いましたが、ここでは読売新聞の論点での記述の一部を紹介させていただきます。

それによりますと、「今後の地域活性化の産業プロジェクトは、地域の総力を結集し、効果を高めるために、テーマを絞り、地域の経営資源、地域の特性に根差した質、量ともに日本で一つ、あるいは日本で一番の専門性、独自性、個性を持った特定の産業の創造を目指すべきであるということである。新世代の産業城下町づくり、いわばメッカづくりである。これは旧世代の企業城下町とは違う」（原文）と述べ、これに続き、産業城下町と企業城下町との違い、産業城下町づくりに必要な施策を列挙、最後に「地域活性化プロジェクトは総花主義から一点豪華主義の時代を迎えようとしている」（原文）と締めくくっています。

今回は字数に制限がありますので、全文の掲載は割愛しますが、企業城下町と産業城下町の違いは重要なことですので、上記の「これは旧世代の企業城下町とは違う」に続く原文を次に紹介させていただきます。

「第一は、企業城下町は特定の企業を頂点として関連下請け企業が傘下に連なる縦の単一構造のまちであるが、産業城下町は特定の産業を核として複数の企業や研究所等が対等の立場で縦横に繋がる複合構造を持つまちである。

第二は、企業城下町は産業の中心が工業のまちであるが、産業城下町は工業、農業、林業、水産業、研究、情報、教育、交流、余暇等の中から、地域の経営資源を最大限に活用できる特定の産業を選択し、創造するまちである。

第三は、企業城下町は生産機能だけのまちが多いが、産業城下町は生産、研究、研修、交流、情報、余暇、文化機能を持ち、これらの優れた総合環境が有機的、複合的、重層的に連携し、特定の産業を創造するまちである。

第四は、産業城下町は起業を支援するまちである。

第五は、企業城下町の多くは他地域との連携、交流が少ない閉鎖的なまちであるが、産業城下町は国内はもとより、海外とも高度情報、高度技術、高速交通ネットワーク等により直結し、地球規模の連携、交流を図る開放的なまちである。」

以上、四半世紀以上前の提言であり、書き忘れてたり、書き込みが足りない部分もありますが、これまでに成功したプロジェクトもありますので、時代の変化を勘案し、ローカルな視点、グローバルな視点を加え、新たな地域でも取り組んでみたら如何でしょうか。